**30年―――――――――――――――――――――――――2020年厳冬の常念岳**

Macchan90

　深いラッセルを経て目指した山頂には、紺碧の空を背景に雪煙が渦巻いていた。雪に宿り、火を焚き、風雪に叩かれ、喘登の果て五日目にしてようやく辿り着いたその絶頂で思ったのは、山を始めた丁度**30年**前の今時分の北海道でのことだった。亡くなってしまった小松健のことを、想った。

　二年前の丁度今頃、十何年振りかに冬山を再開するに当たって松本に向かうバス車中の私の心情にはかなりの悲壮感が漂っていた。夏山や沢登りなら足取りも軽やかなれど、いざ雪の山に再度足を向けるとなるとそれなりに覚悟が要った。荷も重く、パッキングすらも煩わしく感じられた。何故山に登るのか？の自問自答の声が冬になるとよりトーン高く響く。大学山岳部先輩である米山さん宅に投宿し、翌朝バスで松本駅に向かった。そこで見た北アルプスの山脈の中で一際主張を強くしていたのが白い常念岳だった（その左にピョコン尖る槍の穂先も忘れなかった。その年の内に登りに行ったはずだ）。

　ああ、あそこには誰も居ない厳冬期に立ってみたい、そう単純に思った。厳冬の常念岳の頂に。

　ハードルある山に登ってみたいと誰しも思う時、単独行を目指すのも一手だが同好の士を募るのが普通らしく、そんな時の私はこれまで随分と同行者に恵まれてきたと思う。沢登りでは山岳部同期の日下出(いずる)は強い男だった。日本国内の険谷の多くは彼奴と同行して良いスタイルでのトレースが叶った。今では山の世界からすっぱり足を洗ってしまったのが惜しまれる。台湾溯行の縁で繋がった「俺は沢ヤだ」成瀬陽一氏も頼りになる男だった。台湾や中国大陸の辺境地は元より、どんな場所に行ってもこの男とならどうにか何とか生還できると思わせる逞しさがあった。還暦を前にしても若手を抱き込んで未だ精力的に登っている姿にはほとほと感心する。偶然にも同じ団地で育った石際淳氏もまた、特別な方である。宇宙人としか思えない風貌の上に頭脳明晰仕事も早く確実で、その上私の提案する妙な計画に賛同下さる稀有な存在だ。冬山、となるとまた夏とは違ったモノを要求されるのだが、今回の米山さんは私にとって冬山筆頭の同志である。米氏も山岳部部員の例に漏れず学生時分は食生活なんぞには無頓着で野菜の事を“草”と一括して称してしまうような食オンチだったのだが、石崎同様に凝り出すと止まらず今では安く手早く美味いものを作ってしまう人に成り上がって、それが今では生活全般にも及んで更には山での生活技術の点で全く不足無くすべてをこなしてしまい、その最たるものがイグルー建造術にある。日本に於けるイグルゥマスター筆頭と言え、ホワイトアウトしても自信満々なのである。一昨年前の厳冬期鷲羽岳に昨年の唐沢岳北東尾根に続く、今回の厳冬期行である。

今回の計画は米山オリジナルである。氏の住まう松本市街から見渡す未踏のラインが今回の計画線で、常念の北の横通岳東尾根をテケト～に下降し、未登の大物・有明山に繋ぐというのがそもそものプランであったが、果たしてその結果は、、、、。

**一**日目【1/31(金)】晴れ；休暇を取った金曜の4時に起床し、その頃不登校の長男長女の部屋の灯りは付いていたが声掛けせずに半過ぎには家を発った。郡上八幡を越えてせせらぎ街道の明方辺りから雪が舞いだした。このSelfishな時代にコルトレーンの「Selflessness」を聴きながら、これを初めて聴かせてくれたのが探検部ののび太さんで、それが丁度**30年**前の今頃であるのを思い出した。当時の札幌は寒かったなぁ、実に。エルビンならぬロイ・ヘインズのドラミングが殊の外素晴らしい。雪道の安房峠を越えて着いた高山市街でまたしても迷ってしまった。15分遅れの7:45に待ち合わせの一日市場駅に到着できた。今回の計画立案は米山さんで、氏の住む松本の街からぐるり見渡せるその稜線を登山ラインとしたもの。私も当然辿ったことのないライン故に異論はなかった(実はプランニングの段では白馬岳から日本海親不知まで、地蔵尾根から仙丈ヶ岳・甲斐駒ヶ岳、日光白根山から皇海山の三案があった)。唯、取り付きに難があって、冬季閉鎖の三郷スカイラインをそのまま行くのではなく地図上破線から尾根に上がる計画としたために、藪漕ぎの警戒からスキー携行が躊躇われてワカンで対応したのが後々の仇となった。三郷スカイラインのゲート右奥に私の車を捨てて歩き出したのが9時、ここいらは雪がチラホラあるのみで作業道を沢沿いに辿っていく。案じられた尾根取り付きは意外にも私が作業現場とする林業のヒノキ一斉林で下草も無く快調に高度を獲得していった。三郷スカイライン上の「41号カーブ」に予想を上回る早さで到着したが、実はそこまで。林道上からワカンラッセルが始まった。展望台からは富士山が遠望された。米氏によれば取り付きの北小倉集落はこの周辺で唯一富士山が望める地なのだという。地図上で興味を惹いた冷沢用水に着いたのが14時過ぎで、興味関心そこそこに尾根に取り付いて暫くで天場適地の平坦地見つけて幕とした。冬とは思えない素晴らしく快適な夜を過ごした。

**二**日目【2/1(土)】晴れ；明けて快晴の朝をのんびりと迎え、昨日に引き続きラッセルが続くも鍋冠山が中々近付いてこない。ナベカンまで予想外の5時間も掛けてしまい、本日中の大滝山到着の希望は儚くも消えた。スキーを持ってきていさえすれば、とは今更言うまい。取り付き尾根と横通岳東尾根下降に確証が持てなかったことが不携行の理由であった。本計画は山スキー向きの地形なので、滑降はさておき以降計画される向きには携行を強くお勧めする。八丁ダルミでヘバッて幕とした。豊かな針葉樹の小地形上の穏やかな場所であり、のんびりするには好適な地であった。今宵も○○を楽しんだ。

**三**日目【2/2(日)】晴れ；今日こそ大滝山へ、と勇んで発つ。快晴故に気温低く、汗をかかない登高はバリズボ具合も手伝って昨年の唐沢岳北東尾根を想起さす。樹林が疎になり傾斜が増し、右手に小さな雪庇を見るに至って大滝山北峰に到達した。穂高と槍ヶ岳が眼前に現れて声が出た。その展望は無限大で、御嶽乗鞍立山剱は言うに及ばず、浅間山に四阿山、八ヶ岳南アに富士山、また鹿島槍に爺ヶ岳の双耳峰が重なって見える。大滝山南峰にも立ち寄ったら今日も時間が押して、北峰北の・2605北の台地状にいよいよお得意のイグルーを建造して泊地とした。日没を拝みながらズブロッカを煽る。広めに作ったイグルー内は、湯たんぽ付きで実に快適であった。

**四**日目【2/3(月)】晴後地吹雪；節分の朝を迎えた。夜半より風が出だしたが、発生した小さな低気圧の影響だろうか。イグルーに切った窓穴から槍ヶ岳を撮り、松本平の街灯りを望んで発ったが寒い。雪煙を纏った穂高など、実にリアル冬山の風情である。「ここからの穂高が一番見栄えがイイんだよ」とは米氏の言で、確かにイカシテル。前穂と北穂とを従えた奥穂は確かに一つの城であり国である。アレにこの時期立ちたいかと問われれば、、、、どっちでもいい。足回りがワッパ(わかん)の我々は相も変らぬ脛ラッセルで、一旦下る樹林帯では時折腿までのソレになる。低温で雪は砂糖菓子のようで、衣服への付着は一切ない。高野亮氏が春山を嫌い冬山を好んだ点はこんなところにあるのだろう、純度が高いといえばいいのか。風の勢いは増し、樹林帯から吹き曝しの樹林限界上に躍り上がるこれからに不安を感じないわけにはいかないが、個人的には蝶ヶ岳ヒュッテの存在をアテにしている心情は確かにあった。その白い領域では時折爆風に晒されて耐風姿勢をとる羽目に。山頂では一昨年前の鷲羽岳の山頂のようなシビアさで、大して余裕は無かった。下調べ無しで向かったヒュッテにはやはり冬季小屋が併設されており、風の収まりを待つ休憩と称して結果、半日行動の半日停滞日となった。一昨年前の三俣山荘避難小屋とは雲泥の差の快適さで、何より室内にトイレまで設置されている！　昼過ぎて風止まぬので停滞決定として、焼酎を飲み出した。こんな停滞は今後もう在り得ないであろう、そんな快適さであった。この上薪ストーブがあったりなんかしたら、、、、スミマセン、欲をかいちゃ駄～目。夜になって風益々唸る。明日の常念岳乗っ越しも危ういか？　寒いけれど乾いた板の間にツェルト吊ってその中で横になった。

**五**日目【2/4(火)】快晴；ペットボトル湯たんぽのお陰で6時間程熟睡した。外では風の音止まず、ここから三股へ下山だらう、ここまででも随分と満足のゆく山行だったゎ、と自らを慰める言葉を用意しておいて戸外に出て見れば、果たして視界無限大の快晴ではないか！　バリバリの冬型のはずだが常念山脈は南ア同様冬型に強い山列なのか。立春の初日の出をこのような地で拝めるとは我々も幸運である。コースタイムが気掛かりで、天気判断も兼ねて蝶槍までの区間で今日を占おうと二人出立した。稜線部分はカリカリで、夏時間よりも速いペースで蝶槍に到達、槍穂も暗雲に呑まれることも無く天気は持ちそうで「こうなりゃ行くか」。これから二つのアップダウンのコースタイムが随分見てあるのに警戒して、気を入れて進んでいく。樹林帯への下りが至福の時間だった。低温でフカフカの雪に腿まで埋もれながら進軍してゆくこの愉悦と言ったら無く、山に登り続けてきて本当に良かったと心底感じた時間だった。進むごとに穂高連峰が遠ざかり、それに対して槍ヶ岳の穂先がトンガリの度を強めて益々尖ってゆく。・2512からの最後の登りがキツかった。二年前の鷲羽岳と今回の常念岳南面はその感じが実に似ているのであるが、前回がアタック装備であったのに対し今回は全装での乗越でラッセルこそ影を潜めたものの二人共に疲労の度がもろに行動に現れた。しかしそれもいつしか果て、見覚えある標柱が視界に入ってきた。二年半前の夏の山頂にあれ程居た登山者も今は我々以外には居らず、風の音がするのみの静かな山頂で握手を交わした。哀感を伴って。二年前に松本駅から見上げたあの白い山頂に、遂に立てた。私は夏以来の二度目、米山さんにとっては五度目の登頂だそうで、聞けば三度目は当時の皇太子殿下、現天皇陛下と登ったとのこと。「さて、ここで泊るかい？」という米山氏に対して私は明日以降の仕事が気掛かりで(あろうことか、山頂から同僚にもう一日の休暇取得の電話をした)、少しでも標高を下げたいと言うと意を汲んでくれて前常念へ向けて下降を開始した。それでも折角の機会なので松本平と富士山と穂高が望める標高2500ｍ辺りに適地があったのでそこに今山行二つ目のイグルゥを建造した。しかし氏に言わせれば標高が下がり過ぎており採取する雪ブロックが今一つの雪質だそうで、苦労して切り出し三度崩しつつも積んでいった。穂高岳に沈む夕日を見届けて、山陰に沈む松本平を見下ろしてイグルー内にスッ込んだ。風強まり、隙間を埋めて寝袋に入ったものの、、、、、。

**六**日目【2/5(水)】粉雪がイグルー内に吹き込んで殆ど寝られぬ朝を迎えた。ラテルネ付けてみてイグ内が白い世界なのを知った。アチャ～、最終日だからいいものの、これが中日だったらめげるなァ、そんな惨状である。米氏にとっては幾度目かの経験だそうで、もっと吹雪くとすっぽりと綺麗に埋まるとのこと。雪に塗れて茶をシバきいつもの棒ラーメンを腹に収めてマワシをし、ザックにあれこれ強引に突っ込んでブロック蹴破り外に出でればやはり吹雪いており、、、、山頂泊でなくてヨカッタ。昨夕、風吹で視界無くしても下降路の確認はとってあったので危機感無く下山を始めた。じき樹林帯に潜り込んで一息つく。いつもは邪険にする目印ペンキを今日ばかりは有難く感じて標高を下げてゆく。登路には採りたくもない急傾斜でご無体な登山道をグングン下って、二年半前に間違えて来たことのある三股着が10時半過ぎのこと。昼過ぎのスギさん(米氏奥方で、偶然にも私の探検部時代の先輩に当たる)とのゲート合流に間に合わせるべくツッタカ林道歩いた。山抜けしたショートカット道にチョ嵌りしてゲート着が両者ドンピシャで、その三人で須砂渡食堂に駆け込んだ。入山地に私の軽自動車を取りに戻り、米家長女ママ友から林檎5㎏買い、手を振って帰途に着いた。安房峠周辺では引っくり返った富山№赤のアウディを横目に、我が人生の如く安全運転で岐阜までのドライブを楽しんだ。眠い目を擦り擦りて。

　冬山を始めたのが丁度**30年**前の今時分のこと。探検部で齧ったその冬山登山に不思議と魅入られて、学寮のアルバイトで偶然にも隣り合わせた山スキー部の某氏が私の志向を聞いて勧めたのが山岳部への転部である。そこで初めての山行が札幌近郊のスキー山行だったが、ゲットさんに曳き回されてヘロヘロで下山してみて得たのはつい数日前に話したばかりの別パーティーだった小松健が遭難死したとの報だった。先だって居た人間が、いとも簡単に姿を消してしまう冬山という世界に怖気づきそうになりながらも、何とかこれまで登山を続けてきた。私にとり登山は、原木から仏像をイメージして彫り上げる円空の生き様を思わせる行為に当たり、生きる意味をDigする作業でもある。小松よ、お陰で無事にここまで来られた。止めず続けてきて良かった、そう思えた今回の六日間山行だった。未来ではない30年はあっと言う間の歳月だった。遠からず、横手に参りに行くでなぁ。

【タイム】

1/31自宅発(448)一日市場駅(745)駐車(900)41号カーブ(1120-45)ゲート(1245-1300)冷沢用水(1420-1500)標高1880ｍ泊地(1530)

2/1起床(550)発(745)鍋冠山(1240-1300)八丁ダルミ泊地(1530)

2/2起床(425)発(720)大滝山北峰(1300/1410)南峰(1325-50)・2605北泊地(1440)

2/3発(640)蝶ヶ岳(940)蝶ヶ岳ヒュッテ冬季小屋(955-)

2/4発(700)蝶槍(740-50)・2592(905-25)・2512(1000-20)常念岳(1238-1255)前常念(1335-1415)標高2500ｍ泊地(1440)

2/5発(700)分岐(830-35)三股(1040-55)ゲート着(1310)

【2020.2.9の、小松健遭難から**30年**目の日に記す】